

スワンプマン論法と物理主義

0. スワンプマン前史

沼の灌木に雷が落ちてスワンプマン誕生！というのがデーヴィッドソンのストーリーであったが、スワンプマンというのは、歴史を持たず、偶然に生まれた人間の物理的レプリカである。従ってスワンプマンは定義的に歴史を持たないが、その議論の歴史は確かに存在する。

「スワンプマン」という名前はもちろん Davidson (1987) に由来するが、この議論は本来、生物学的に真正な「機能」というものを進化史によって定義しようとする目的論的機能主義に向けられたものであり、同様の議論はパピノー (Papineau 1984) とミリカン (Millikan 1984) において (自らの目的論的機能主義を論じる文脈で) perfect double や accidental replica という名で登場する。古くは 1976 年に Boorse が目的論的機能主義を批判する文脈で非常に短くこの議論を展開している (pp.74-5) のが最初のようなのである。他方最近では 1996 年に「スワンプマン・フォーラム」が *Mind & Language* 誌上で開かれ¹、ミリカン、デネット、パピノーらが寄稿している。

他方、そのスワンプマン論法が向けられている当の目的論的機能主義の方は、恐らく Boorse が批判している Larry Wright の論文 (Wright 1973) が最初の明確な定式化である (Boorse が言及している George C. Williams も似たような考えを提示している (Williams 1966) が、Williams の方は生物学者であり、より広くこの考えを取るならば、もちろん我々はダーウィンその人にまで遡らねばならないだろう)。いずれにしても、この考えが特に重要となるのは、それが Block (1980) の提示した、リベラリズム (中国人民でも同じ機能を実現できる) と排外主義 (人間の脳の機能だけが心を実現する) との間の機能主義のジレンマを逃れる「第三の道」であると考えられるからであろう。従って逆にこの考えを受け入れない者は、ブロックのジレンマを逃れる (アドホックでない) 代替案を独立に提示せねばならない。

スワンプマンが近年特に注目される背景には「表象主義」が心の哲学において勢力を伸ばしてきたことにある。私自身は表象主義にはコミットしていないし、特に、クオリアが表象主義で説明できるとはとても思えない²。経験内容と思考や信念の内容は、まったく違う説明を必要とし、後者は前者に依存すると考えるべきであると私は考える。だが、スワンプマンは目的論的機能主義一般に対する挑戦であることを忘れてはならない。目的論的機能主義者であれば、スワンプマンにはどのような生物学的機能も認めることはできな

¹ *Mind & Language*, vol. 11, No.1, March 1996.

² 例えばそれが、ジャクソンの知識論法に対する答えを与えているかどうかは非常に怪しい。これについては Graham & Horgan (2000) 参照。

い。そして生物学的機能を一切持たないものは生命でさえなく、心的内容を持つこともできない。スワンプマンは、表象主義者でなくとも広く問題となるのである。

なお本稿は、前田高弘氏の反論(前田 2001)への応答として書かれたものを、より一般的な議論へと拡張したものである。

1. 前田氏の議論

スワンプマンの本質は、いかにありそうもないことであろうと、それが「偶然」生まれた、ということにある。だが、前田高弘氏(以下敬称略)は、この「ありそうもなさ」を突くことで、むしろスワンプマンは想像も不可能であると論じた(前田 1999)。彼の議論は、水本(2000)における紹介によれば、

$\sim\Diamond(Sx \supset Qx)$ (P1)

を

$\sim\Diamond(Sx \supset Qx)$ (P1')

として(Sx : x はスワンプマンである, Qx : x はクオリアを持つ),

$\sim\Diamond(Sx)$ (P2)

から導こうとするものである。

前田はこれに対し、自分はそもそも P1 を主張していない、と反論している(前田 2001)。だが、彼自身、「スワンプマンがクオリアを持つことを否定できないがゆえに、スワンプマンの存在を疑問視するという方法を追及したのである」と言っている(p. 89)。つまり、やはりクオリアを持つスワンプマンの存在($\Diamond(Sx \supset Qx)$)は目的論的機能主義、とそれに基づく多くの表象主義にとっての反証となる。だからこそその可能性を否定するために彼はスワンプマンそのものの可能性を否定しようとしたのである。このことはしかし、

$\sim\Diamond(Sx \supset Qx)$ (P3)

を言うために P2 を示そうとしたことであろう。しかしこの P3 はまさに水本の P1' である。(そして実際 P2 から P1' への推論は妥当である。)なぜ彼はこの分析に不満なのであろうか。前田はなぜか上の P1 を

$\sim\Diamond(Sx \supset Qx)$ (P4)

と分析し、それを「明らかに変である」と言う (p. 91)。だがここで明らかに変だと言われているのは、前田の解釈 P4 なのであり、それは結局水本の解釈 P1' で正しかったということの意味しているにすぎない。ちなみに前田自身の P1 の読みの提案、

$$\neg_x(Sx \sim \Diamond Qx) \quad (P1'')$$

は不十分である。それはこの世界でたまたまスワンプマンであるものが（もし存在するとしても）クオリアを決して持たない、ということしか言っておらず、他の世界におけるクオリアを持つスワンプマンの存在可能性、

$$\Diamond_x(Sx _ Qx)$$

を排除しないからである³。

さて前田の議論は、スワンプマンの形而上学的不可能性を言うために、スワンプマンの想像不可能性を示す、という形になっている。彼は、想像可能性から形而上学的可能性へ移行する議論自身には異を唱えない（前田 1999 p. 68）。ゆえに彼の課題は、想像可能性を否定する、という（少なくとも一見）より困難なものとなっている。（もちろんここでの「想像可能性」は単なる一見した (prima facie) 想像可能性であってはならない。これについては次節参照。）だがこの戦略は、まず想像可能性に訴えることで形而上学的可能性を確立しようとするような、ひとつの議論を阻止するだけで、形而上学的不可能性一般を確立するものではない、ということに注意しよう。これは彼の目的にとっても不十分なのではないだろうか。もう一度彼の説明を見よう。

[...]スワンプマンが出現するような世界がいかに我々の現実世界からかけ離れているかを示すことにより、スワンプマンの形而上学的可能性を疑わしくさせ、結果的にスワンプマンが想像可能ではなくなるようにすること、これが私の戦略である。（前田 1999 p.71）

言うまでもなく、形而上学的可能性を「疑わしく」させるだけでは不十分であり、たとえそこから想像不可能性を確立することができたとしても、そこからさらにスワンプマンの形而上学的不可能性が導かれるわけではない。

そして、私には結局、今回の反論を見ても、そこに何かが付加わったとは思えなかつ

³ 恐らく P1'' は、Davies & Humberstone 1981 の "fixedly actual" というオペレータ FA（これは二つのオペレータの組み合わせである）を左につけてやれば彼の意図したとおりの意味になるだろう。

た．恐らく決定的な部分は彼の次のような言葉であろう。

思うに，スワンプマンの議論を受け入れる人は，「ありそうもないけど不可能ではない」という直観に基づいてそうするのだろう．[...] 水本氏は，「単に不可能であるとは思わないから」という理由で，スワンプマンの不可能性に関する挙証責任を私に押し付けているが，その前に，どのような意味でスワンプマンが不可能であるとは思わないのかを明らかにしてくれなければ，私としてはその要求に答えようがない．だが，物理的に不可能ではないというならば，恐らくもはや単なる直観のぶつけ合いにしかならないように思われる．(前田 2001 p. 91)

二番目の文は彼自身の約束に反している．

だが，想像可能性そのものに罪はない．基本的に，想像可能性に基づく議論については，その議論が間違っていることが明白でない限り，挙証責任はその議論に反対する側にあると言えよう．(前田 1999, p. 70)

したがって，前節の終わりに示した原則により，挙証責任はスワンプマンの可能性を否定する側にある．(op. cit. p. 71)

そして最後の文の表現(「直観のぶつけ合い」)から読み取れるのは，彼自身が結局「直観」に訴えようとしているということである．彼の議論は結局一つの「直観」が間違っているという「論証」ではなく，また別の「直観」に訴えるものだったのである．だが，前田氏以上に私は「直観」を信用しているわけではない⁴．ましてやスワンプマンが生じうるのか生じえないのかは，直観が決定できるようなものではないだろう．我々が前提しているのはただ，スワンプマンの可能性を否定するようなものは見当たらない，というネガティブな根拠であり，だからこそ前田氏は，直観に訴えない積極的な「証拠」を提示するべきだったのである．そしてそれができないのであれば，挙証責任がある側の負けであろう．

相対性理論や量子力学も，著しく我々の直観に反する側面がある．だがそれらが認められてきたのは，経験的一般化として理論が構築されてきたからであり，直観に反する部分が少々帰結しても，全体としての理論がデータと合致しているからである⁵．同様に，目的

⁴ 「直観」に関しては，Rey (1998)が引用しているドレッツケとクリプキの相反するコメントが興味深い(p. 454, n. 27)。また，デネットが思考実験全般を”intuition pump”として否定的な態度を取っているのは周知の通りである。彼のスワンプマンフォーラムへの寄稿文はまさに「デネット節」全開である。

⁵ と，少なくとも考えられている．だがたとえ(このような考えに批判的な)ファイヤーアーベントであろうと，新しい理論を受け入れたために，我々の直感が結果として大きく変化する事態を認めるであろう．

論的機能主義の観点から見れば、それがデータから導き出される（生物学的）機能についての最も自然な理論である以上、今まさに直観が覆されようとしている、と主張する権利があるはずである（この文脈におけるデータとは、我々が知る限りの生命と生物学的機能は全て進化の産物である、という経験的事実である）。それゆえこれは「直観」の問題ではないのである。もちろん物理学のように目的論的機能主義は「予測」を行うことはしないが、それは進化論が未来についての予測をしないのと同様である。

従って、私は前田の議論が結局何も達成しなかったと考える。だがそのことは、それが確立しようとしていた主張そのものが誤っていたということにはならない。それどころか、私は結局彼と主張を共有しているのではないかと最近思うようになった。

2. テーゼ MM

私と前田が同意しているように見えるのは、以下のようなテーゼである。前田は、物理主義の真を前提してスワンプマンの想像不可能性を示そうとした。すなわち、彼が正しければ（他の疑わしい存在論的前提はなかった以上）、

もしスワンプマン（の発生）が想像可能ならば、物理主義は偽である。

ということになる。これを「前田 = 水本（MM）テーゼ」と呼ぼう。（注意せねばならないのは、前田は「想像可能性」でどんな恣意的な想像も含めているわけではなく、適切な科学的知識を前提し、それに反しない限りでの想像可能性である。これはチャルマーズ (Chalmers 2002) の言う「理想的で第一次的でポジティブな思惟可能性 (ideal primary positive conceivability)」と同様のものであると理解するべきであろう。) もちろんここでは我々は、自然主義の最も（あるいは唯一の）有望なプログラムとしての目的論的機能主義を前提している（これについては以下で再び触れる）。

私の考えでは、前田は、テーゼ MM の論証に失敗した。本稿の目標は、このテーゼを彼に代わって私なりの仕方で論証することにある。テーゼ MM を使ってスワンプマンの想像可能性から物理主義の偽を導く議論を詳しく展開すれば、以下のようなだろう。

- 1) スワンプマンは想像可能である。
- 2) スワンプマンが想像可能ならば、形而上学的にも可能である。
- 3) スワンプマンが形而上学的に可能ならば、物理主義は偽である。
- 4) 従って物理主義は偽である。

これを「スワンプマン論法」と呼ぼう。この議論の 2) と 3) がテーゼ MM を展開したもので

あるが、3)自身はさらに、ゾンビ論法を内に含む。すなわち、3)は、正確には

- 3-1) スワンプマンはゾンビである⁶。
- 3-2) スワンプマンが形而上学的に可能であれば、ゾンビも形而上学的に可能である。
- 3-3) ゾンビが形而上学的に可能であれば、物理主義は偽である。

という議論の短縮形であると理解できる。ゾンビ論法のコアである 3-3)は、少なくとも直感的には問題がないだろう。ゾンビは人間の物理的レプリカであるが、クオリアを欠いている。もしゾンビが可能ならば、クオリアは物理的事実以上の何かであることになり、物理主義は偽とされる。本来ゾンビ論法は、「不在のクオリア」の議論として以前から知られたものであったが (Block & Fodor 1972, Shoemaker, 1975, Block 1980), それは主に機能主義一般に対する批判の文脈で論じられていた。チャルマーズがこれを、物理主義に対する批判として定式化できた (Chalmers 1996) のも、ある意味で機能主義がそれほど心の哲学において支配的となってきたということをも物語っているのかもしれないが、ゾンビ論法自身は、機能主義を前提する必要はないことに注意しよう⁷。(だがもちろん、我々の 3-1) は目的論的機能主義を前提している。)

さて、このスワンプマン論法から物理主義を擁護するためには、1)から 3)までのいずれかを拒否する必要がある。具体的に見れば、選択肢は以下のようなものとなる。

- 1)を否定する：前田
- 2)を否定する：信原
- 3)を否定する
 - i) 目的論的機能主義を否定する：Block
 - ii) 目的論的機能主義を修正する：Tye
 - iii) ゾンビ論法を拒否する：柴田
 - iv) 付随性の概念だけがんばる：Kim

以下では順にそれぞれの可能性を見ていこう。[以下略]

⁶ 通常哲学的ゾンビは、人間と同じ機能を持つが、クオリアのみを欠く物理的レプリカである。従ってゾンビは命題的態度を持ちうるが、スワンプマンは、生物学的機能を一切欠くため、クオリアだけでなく命題的態度も持たない。また、論者によっては逆に、スワンプマンは命題的態度を欠くがクオリアは持つ、と考える者もいる。私は Dretske (1995) に倣い、スワンプマンはクオリアも持たない、と考えるが、この点は以下の論点にあまり効いてこない。

⁷ 機能主義は、主にゾンビ論法 3-3) の前件、ゾンビの形而上学的可能性を論じる時に関わってくる。

References

- Braddon-Mitchell, D. and Jackson, F. (1997), "The Teleological Theory of Content", *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 75, No. 4, 474-489.
- Block, N. F., J. (1972). "What psychological states are not" *Philosophical Review* 81: 159-81.
- Block, N. (1980), "What is functionalism?", *Readings in the Philosophy of Psychology*, Vol. 1, Cambridge: Harvard University Press.
- Block, N. (1990), "Inverted Earth", *Philosophical Perspectives* 4, 53-79.
- Chalmers, D., J., (1996), *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press. 邦訳『意識する心：脳と精神の根本理論を求めて』林一訳，白揚社，2001年。
- Chalmers, D. J. (2002), "Does Conceivability entail possibility?" *Conceivability and Possibility*, ed. by T. S. Gendler and J. Hawthorne, Oxford University Press.
- Davidson, D. (1970) "Mental Events", reprinted in *Essays on Actions & Events*, Oxford University Press, 1980.
- Davidson, D. (1987), "Knowing One's Own Mind", *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 60, 441-58.
- Davies, M. & Humberstone, I. L. (1981), "Two notions of necessity", *Philosophical Studies* 58: 1-30.
- Evans, G. (1979). "Reference and contingency." *The Monist* 62: 161-89.
- Graham, G. & Horgan, T. (2000), "Mary Mary, Quite Contrary", *Philosophical Studies* 99, 59-87.
- Horgan, T. (1993), "From Supervenience Superdupervenience: Meeting the Demands of a Material World", *Mind* 102, 555-86.
- Kim, J. (1998), *Mind in a Physical World*, MIT Press.
- Kripke, S. A., *Naming and Necessity*, Harvard University Press, 1980.
- Lycan, W. C. (1996), *Consciousness and Experience*, MIT.
- Lycan, W. C. (1998), "In Defense of The Representational Theory of Qualia (Replies to Neander, Rey, and Tye)", *Philosophical Perspectives*, 12, *Language, Mind, and Ontology*.
- Millikan, R. G., *Language, Thought, and Other Biological Categories*, MIT Press, 1984.
- Millikan, R. (1996), "On Swampkinds", *Mind and Language*, Vol. 11, No. 1, 103-117.
- Papineau, D. (1984), "Representation and Explanation", *Philosophy of Science*, 51.
- Papineau, D. (1993), *Philosophical Naturalism*, Oxford, Blackwell.
- Papineau, D. (1996), "Doubtful Intuitions", *Mind and Language*, Vol. 11, No. 1, 130-132.
- Papineau, D. (1998), "Teleosemantics and indeterminacy", *Australasian Journal of Philosophy*, vol. 76, No. 1, pp. 1-14.
- Papineau, D. (2001), "The Status of Teleosemantics, or How to Stop Worrying about Swampman", *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 79, No. 2, pp. 279-289.

Rey, G. (1998). "Inverted earth, swampman, and representationism", *Language, mind and ontology*. Oxford, Blackwell.

Shoemaker, S. (1975). "Functionalism and qualia." *Philosophical Studies* 27: 291-315.

Stoljar, D. (2000), "Physicalism and The Necessary A Posteriori", *The Journal of Philosophy*, 97, pp. 33-54.

Tye, M. (2000). *Consciousness, color, and content*. Cambridge, Mass., MIT Press.

Wilson, J. (1999), "How Superduper Does a Physicalist Supervenience Need to Be?", *The Philosophical Quarterly*, Vol. 49, No. 194, 33-52.

前田高弘 (1999), 「スワンプマンにさよならする」『科学哲学』 32 - 1, 67-81.

前田高弘 (2001), 「スワンプマンに再会する」『科学哲学』 34 - 1, 89-93.

水本正晴(2000), 「スワンプマン擁護のために」『科学哲学』 33 - 1, 87-90.